

異域知識人の出会い —朱舜水と安東省菴の思想異同試論—

徐 興慶

- 一、はじめに
- 二、『學部通辨』に見る安東省菴と朱舜水の思想主張
- 三、『初學心法』に見る安東省菴の思想主張
- 四、「忠」に対する朱舜水と安東省菴の思想主張
- 五、おわりに

一、はじめに

安東省菴（守約、恥齋、1622-1701）は徳川初期福岡柳川藩の儒臣で、1649（承應三）年、二十八歳の時に京都へ赴き朱子学者の松永尺五（1592-1657）の門下に入った。松永尺五は徳川初期の著名な歌人・俳人松永貞徳（1571-1653）の子息で、藤原惺窩（1561-1619）の京学派を受け継ぎ、1648年に京都の堀川で私塾を開いた。当時、安東省菴の同門には木下順庵（1621-1698）、貝原益軒（1630-1714）、宇都宮遯庵（1633-1707）など著名な儒生がいた。省菴は「丁酉歳旦」に「予遊學京師多年、省親歸郷居月餘、遊長崎經句又歸郷。（予京師に遊學すること多年、親を省して郷に歸る。居ること月餘にして長崎に遊び、句を経て又た郷に歸る）」と記しており、⁽¹⁾ 彼は1657（丁酉、萬治元）年以後に朱舜水と出会ったが、二人を紹介したのは、長崎で時折省菴を診療した帰化人の唐医陳（潁川）入徳（1595-1674）であった。水戸藩の儒者安積覺（澹泊、1656-1737）は「省菴文集序」に二人の交遊状況を次のように述べている。

聞明徴君舜水朱先生來長崎、往見之、遂執弟子之禮。先生亦悅其天資純粹、以為元定真吾老友、屬意最深。而先生流落海外、孤莖無所立。…間有知者、叩之不能究其精、探之不能發其蘊。唯省庵切問近思、入其室、造其奧、自朱陸之辨、以至窮理盡性精一執中之旨、靡不講究刮磨、得之於心而驗之於操履之實。故其為文、根據於理道、而夷粹平實、一切浮靡詭譎之言、無所從出。

明の徴君 舜水朱先生 長崎に來るを聞き、往きて之に見え、遂に弟子の禮を執る。先生亦た其の天資純粹なるを悦び、以て元定は真に吾が老友と為し、意を屬すること最も深し。而して先生海外に流落し、孤莖 立つ所無し。…間、知る者有るも、之を叩くも其の精を究むること能はず、之を探るも其の蘊を發すること能はず。唯だ省庵のみ切に問ひ近く思ひ、其の室に入りて、其の奧に造り、朱陸の辨より、以て窮理盡性精一執中の旨に至るまで、講究刮磨せざるは靡く、之を心に得て之を操履の實に驗す。故に其の文を為る、理道に根據して、夷粹平實、一切の浮靡詭譎の言、従りて出ざる所無し。⁽²⁾

1657年、朱舜水六回目の長崎渡航の際に、安東省菴は陳入徳から二篇の朱舜水の文章を得た。当時朱舜水は急ぎ回航したため、二人が対面することはなかった。しかし、省菴は弟子の身を以て、一首の七言律詩を朱舜水に捧げた。その詩に曰く、

遠避胡塵來海東	遠く胡塵を避けて海東に來り
凜然節出魯連雄	凜然 節は出ず 魯連が雄
勵忠仗義仁人事	忠に勵み義に仗るは仁人の事
就利求安眾俗同	利に就き安を求むるは眾俗に同じ
昔日名題九天上	昔日 名は題す 九天の上
多年身落四邊中	多年 身は落つ 四邊の中
鵬程好去圖恢復	鵬程 好し去りて恢復を圖れ
舟楫今乘萬里風	舟楫 今は乗ず 萬里の風 ⁽³⁾

二人の初対面は1659年の秋に持ち越し、朱舜水が六十歳で長崎居留を決めた後である。

朱謙之氏整理の『朱舜水集』には、「與安東守約書二十五首」、「答安東守約書三十首」、「答安東守約問四十二條」及び安東省菴の「祭朱先生文三首」、「上朱先生二

十二首」があり、さらに、かつて筆者が日本で発掘した「朱舜水寄安東省菴書簡」三十四通、同筆語四十六通⁽⁴⁾などのオリジナル資料は、朱舜水と安東省菴の思想交流を研究する重要な手がかりとなっている。

安東省菴の晩年に子息の守直に遺した訓言には「…我、才なく、徳なし、汝 諸生と年譜行状・行実・碑銘及び文集の序等を撰すること勿れ」と記されていたので、⁽⁵⁾守直はその指示に従い、省菴が逝世の後その行状、行実を記さず、省菴の孫の守經が遂に完成させた。2002(平成十四)年に福岡県柳川市史編纂委員会が出版した『安東省菴集 影印編 I』は、安東省菴の『初學心法』、『三忠傳』、『新增歴代帝王圖』、『幼學類編』、『續古文真寶後集』、『霞池省菴手簡』、『省菴先生遺集』、『恥齋漫録』などの著作を取録している。これらの資料は安東省菴の思想主張を探求するための最も良い参考文書と思われる。

安東省菴は 1659 年に朱舜水と知り合ってから後、その思想主張は変遷しつつあり、その変化の様子は、上記の関係文献に詳しく記されている。本稿は、これらの文献を検索しつつ、省菴が朱舜水の門下生となってから晩年に至るまでの思想変遷を分析し、特に『學部通辨』、「知と行」、「朱陸之辨」及び「忠」などの思想主張を検討した上、二人の思想主張の異同を明らかにすることを目的とする。

二、『學部通辨』に見る安東省菴と朱舜水の思想主張

安東省菴は五十歳を迎えた後、自身の心の修養を向上させるため、先賢の諸書より修養に役立つ名言、箴言などを厳選した上、思想の根本と関わりのある言辞を取録し、『恥齋漫録』(四卷)という漢文隨筆集を編成した。省菴はその自序に次のように述べている。

益勤不怠亦有年、然初不知為學之方、經則泥乎訓詁、文則喜乎絢縟、中焉以為有少得焉。談經只恐註釋不該博、操觚只恐句語不華美、久焉駭懼以為向之所為者、皆恥而已矣。痛悔深懲、悉焚前作、因扁恥齋二字、揭左右以為戒焉、靜而思之。

益、勤めて怠らざること亦た年有り。然れども初より為學の方を知らず、經は

則ち訓詁に泥み、文は則ち絢繡を喜ぶ。中ごろ以為へらく、少しく得る有り、と。經を談じては只だ註釋の該傳ならざることを恐るのみ、觚を操りては只だ句語の華美ならざることを恐るのみ。久しくして駭懼して以為へらく、向^き之^きに為る所の者は、皆な恥のみ、と。痛く悔ひ深く懲りて、悉く前作を焚き、因りて恥齋の二字を扁して、左右に掲げて以て戒と為す。靜にして之を思ふ。⁽⁶⁾

「恥齋」を書名として名づけた理由は、自分が五十歳までに学問を為す道は全てが「恥」であることを痛感し、「恥齋」の文字によって、「恥を知る一端」とし、また「恥じとることのない自己の実現」の思いで、自分を戒めるためであったと記している。『甘雨亭叢書』⁽⁷⁾の編者板倉勝明（1809-1857）が「省菴安東先生傳」において

舜水流落海外、孤莖無依。先生懇求鎮尹、多方以留之、自分俸祿之半以養之。…舜水素嚴毅、不妄許可、至知己二字、尤不假人、獨與明王翊為石交、晚得先生於萬里外、以為奇遇云。餘姚張斐來寓長崎、聞先生聲名、屢寄書以推獎。伊藤東涯稱為關西巨儒、於是其名益顯、上自縉紳諸公、下至書生武弁、莫不景慕。舜水 海外に流落し、孤莖 依る無し。先生 鎮尹に懇求し、多方以て之を留め、自ら俸祿の半ばを分かちて以て之を養ふ。…舜水 素より嚴毅、妄りに許可せず。知己の二字に至りては、尤も人に假さず、獨り明の王翊と石交を為す。晩に先生を萬里の外に得、以て奇遇と為すと云ふ。餘姚の張斐 長崎に來寓し、先生の聲名を聞きて、屢、書を寄せて以て推獎す。伊藤東涯 稱して關西の巨儒と為す。是に於いて其の名益、顯はれ、上は縉紳諸公より、下は書生武弁に至るまで、景慕せざるは莫し。⁽⁸⁾

と述べている通り、省菴が自らの俸祿の半分を割いて、師朱舜水を養ったことは日中文化交流圏に知れ渡っていた。また、伊藤東涯（1670-1736）が省菴を「關西ノ巨儒」と称したことで、その名を知らぬ者はないとも言われた。省菴はその名が世に知られたのは、1672（寛文十二）年、朱舜水が水戸に赴いて講学した後と、一般には目されている。省菴は『恥齋漫録』を著す間に、『學蔀通辨』に訓点を施し、朱子、陸象山、王陽明などの論説について独自の見解を出し、朱舜水の教えを受けたのである。

菰口治氏が整理した安東省菴の略年譜によると、1659年安東省菴は二度目の京

都での勉学の際に『學菴通辨』を入手し、熟読した上、大変感銘を受けたため、その内容に訓点を施したという。さらに、同年の秋頃、長崎にて朱舜水と面会した際に本書を出版した。⁽⁹⁾

老、莊の仏教思想の刺激を受けた宋、明の儒者たちは、ひたすら「心性」を解釈しようとした。明朝の朱子学者陳健（清瀾、1497-1567）は『學菴通辨』の序文にこの本を書いた目的を次のように述べている。

有宋象山陸氏者出、假其似以亂吾儒之真、援儒言以掩佛學之實。…建為此懼、迺竊不自揆、慨然發憤、究心通辯、專明一實、以抉三菴。前編明朱陸早同晚異之實、後編明象山陽儒陰釋之實、續編明佛學近似惑人之實、而以聖賢正學不可妄議之實終焉。

有宋の象山陸氏なる者出で、其の似たるを假りて以て吾が儒の真を亂し、儒言を援きて以て佛學の實を掩へり。…建 此が為に懼れ、迺ち竊かに自ら揆らず、慨然として憤を發して、心を通辯に究め、専ら一實を明らかにして、以て三菴を抉らんとす。前編は朱陸早同晚異の實を明らかにし、後編は象山陽儒陰釋の實を明らかにし、續編は佛學近似して人を惑はすの實を明らかにして、聖賢の正學は妄りに議すべからざるの實を以て終ふ。⁽¹⁰⁾

さらに、陳健は「學菴通辨後編序」には

陸子之所以異於聖賢者、非徒異於聖賢已也、以其逆於禪佛而專務養神一路也。…陸氏之學、尊徳性也、陸氏先立乎其大也、而不知其假似以亂真也、援儒以入佛也、藉儒以掩佛也、有許多弊也。

陸子の聖賢に異なる所以の者は、徒だに聖賢に異なるのみに非ざるなり、其れ禪佛を逆へて専ら養神の一路に務むるを以てなり。…陸氏の學は、徳性を尊ぶ、陸氏は先ず其の大なるを立つ、而して其の似たるを假りて以て真を亂し、儒を援きて以て佛に入れ、儒を藉りて以て佛を掩ひ、許多の弊有るを知らざるなり。⁽¹¹⁾と述べている。彼は朱子学の立場から、仏教や陸象山の「援儒入佛」、「藉儒掩佛」の思想主張を厳しく批判している。省庵は『學菴通辨』を閲覽後、次の跋中を書いている。

學術之菴、釋氏為最甚矣。以談寂滅、則知者好之。以談禍福、則愚者惑之、此

所以其徒愈眾而吾道愈孤也。古者楊墨塞路、孟子辭而闢之廓如也、故曰孟子之功不在禹下。…如陸氏頓悟、王氏簡易直截、乃釋氏不立文字機軸、似以六經為附贅懸疣、且其言曰六經著我、六經亦史、是作後世廢學俑也。彼乃陰勸佛說陽附、吾儒人不覺其自入禪爾。…清瀾先生作為此書、究辨真似、是非明白、痛快不遺餘力、重重蔀障瓦解冰消、其功豈在朱子下乎。己亥冬入雒、剖劘氏就求國字旁訓、守約欲廣諸同志、於是僭為詮次、且以就正於博雅君子也。

學術の蔀は、釋氏を最も甚しと為す。以て寂滅を談ずれば、則ち知者之を好む。以て禍福を談ずれば、則ち愚者之に惑ふ。此れ其の徒愈、眾くして、吾が道愈、孤なる所以なり。古者、楊墨路を塞ぎ、孟子辭して之を闢けて廓如たり。故に曰はく、孟子の功は禹の下に在らず、と。…陸氏の頓悟、王氏の簡易直截の如きは、乃ち釋氏不立文字の機軸にして、六經を以て附贅懸疣と為すに似たり。且つ其の言に曰はく、六經我を著はす、六經も亦た史なり、と。是れ後世廢學の俑を作るなり。彼乃ち陰に佛説を勸め陽に吾が儒に附し、人其の自ら禪に入るを覺らざるのみ。…清瀾先生此の書を作為して、真似是非を究辨すること明白痛快、餘力を遺さず、重重の蔀障、瓦解冰消す。其の功豈に朱子の下に在らんや。己亥冬雒に入る。剖劘氏就きて國字の旁訓を求む。守約諸を同志に廣めんと欲す。是に於いて僭して詮次を為し、且つ以て博雅の君子に就正せんとするなり。⁽¹²⁾

省菴は仏教の「寂滅」、「禍福」などの説が正学（理学）への道を孤立させたため、甚だ學術の發展に損なうものであると批判する一方、朱子が儒者たちに異端、雜学を避けるべきことを訴えつつあり、その功績は孟子より優ると称赞している。また、省菴は陸、王が「心即理」という学理を取り、「生知」を以て「頓悟」の道を理解しようとすることに反対するほか、王陽明は朱子の書簡を寄り集めて『朱子晩年定論』を書き、朱子晩年の思想主張は王陽明自身が唱える方向に轉換するようになり、二人の主張は合致しているという妙論にも賛同できないと言明している。⁽¹³⁾

また、王陽明が朱、陸学の「早同晩異」を故意に「早異晩同」と言い換えたことについて陳建は下記のように批評している。

後人不暇復考、一切據信、而不知其顛倒早晚、矯誣朱子以彌縫陸學也。其為蔀

益以甚矣。

後人復た考ふるに暇あらず、一切據信して、其の早晚を顛倒し、朱子を矯誣して以て陸學を彌縫するを知らざるなり。其の部為る 益、以て甚し。⁽¹⁴⁾

さらに、省菴も「愈巧遮掩愈深、此皆根據釋氏所以其部為最甚也。(愈、巧みに遮掩して愈、深し。此れ皆な釋氏に根據す。其の部 最も甚しと為す所以なり)」と王陽明を非難し、その儒仏混同の學問を為す態度に「簡易直截」と駁論し、その行為は後世が勉學を弛めていく誘因になるものと考えている。その際、省菴は三十八歳で、『學部通辨』が陸、王の學說を批評した内容に甚だ賛同の意向を表し、「真似を究明し、是非は明白で、痛快にして余力を遺さず」と、朱子學に傾倒する立場を表明している。なお、『學部通辨』の陸、王學の非を弁論する内容は省菴と同世代で九州地方の教育、經濟發展に貢獻した福岡藩儒の貝原益軒にまでその影響を及ぼしている。⁽¹⁵⁾ 戴瑞坤は安東省菴、貝原益軒とともに海西(九州)朱子學派を代表する主要な人物で、安東省菴、貝原益軒と同様に羅整庵の思想を受容していた。日本の哲學家井上哲次郎が述べる所を引用すれば、省菴の「理氣合一論」では理は氣に隨つて存在するとされ、氣一元論の見解とは相当近いものであった。理氣合一や氣一元論によって朱熹の理一元論を改めたのが海西朱子學派の特徴である。⁽¹⁶⁾

「朱、陸異同」の問題について、省菴は長崎へ赴いて朱舜水と出会った後、下記のように問うた。

朱陸同異、不待辨說明矣。近世程篁墩『道一編』、席元山『鳴冤錄』、其誣甚矣。然「尊徳性」、「道問學」、陸說亦似親切、奈何？

朱陸の同異は、辨說を待たずして明らかなり。近世程篁墩の道一編、席元山の鳴冤錄、其の誣ふるや甚し。然れども尊徳性、道問學は、陸說も亦た親切に似たり、奈何。⁽¹⁷⁾

朱舜水は次のように答えている。

「尊徳性」、「道問學」、不足為病、便不必論其同異。生知、學知、安行、利行、到究竟總是一般、是朱者非陸、是陸者非朱、所以玄黃水火、其戰不息。譬如人在長崎往京、或從陸、或從水。從陸者須一步一步走去、由水程者一得順風、迅速可到。從陸者計程可達、從舟非得風、累日坐守。只以到京為期、豈得曰從水

非、從陸非乎？然陸自不能及朱、非在徳性問學上異也。

尊徳性、道問學は、病と為すに足らざれば、便ち必ずしも其の同異を論ぜず。生知學知、安行利行、究竟に到らば總て是れ一般なり。朱を是とする者は陸を非とし、陸を是とする者は朱を非とす、所以に玄黄水火、其の戦ひ息まず。譬へば人の長崎に在りしが京に往くに、或ひは陸よりし、或ひは水よりするが如し。陸よりする者は須く一歩一歩走り去くべきも、水程よりする者一たび順風を得ば、迅速に到るべし。陸よりする者は程を計りて達すべきも、舟よりするものは風を得るに非ざれば、累日坐守せん。只だ京に到るを以て期と為さば、豈に水よりするを非とし、陸よりするを非とすと曰ふを得んや。然れども陸は自ら朱に及ぶ能はず、徳性問學の上に在りて異なるに非ざるなり。⁽¹⁸⁾

安東省菴は「朱陸辨」で以下のように述べた。

然本末元非二、況其師堯舜、尚仁義、去人欲、存天理、則其心同、其道同。是知其支離禪寂也、特末流之弊爾。…是心迹同異、不害於道也。…是學術同異、不害於道也。苟析聖徵心、則同異之嫌無容於喙矣、學者其平心察之。

然れども本末は元より二に非ず、況んや其の堯舜を師として仁義を尚び、人欲を去りて天理を存するは、則ち其の心は同じ、其の道は同じ。是に知る、其の支離禪寂や、特に末流の弊なるのみ。…是れ心迹の同異にして、道に害あらざるなり。…是れ學術の同異にして、道に害あらざるなり。苟くも聖に析し心に徴せば、則ち同異の嫌ひ、喙を容るる無し。學ぶ者 其れ心を平かにして之を察せよ。⁽¹⁹⁾

朱陸の思想主張は源は同じだが方向が違うと考えたのである。このように尊朱を脱した立場は、明らかに朱舜水の影響を受けている。林慧君は、安東省菴は朱陸と互いに異なる基礎に立ちながらも、その差異を超え同一の目標に達し、「至公無我の論」という学問的立場を表したと考えている。⁽²⁰⁾

王陽明の学問について、朱舜水は省菴からの「陽明之學近異端、近世多為宗主、如何？（陽明の学、異端に近きもの、近世多く宗主と為すは如何）」という質問に対し、下記のように答えている。

王文成亦有病處、然好處極多。講良知、創書院、天下翕然有道學之名。高視闊

歩、優孟衣冠、是其病也。…其徒王龍溪有語錄、與今和尚一般。其書時雜佛書語、所以當時斥為異端。

王文成も亦た病處有り、然れども好き處も極めて多し。良知を講じ、書院を創り、天下翕然として道學の名有り。高視闊歩し、優孟の衣冠のごときは、是れ其の病なり。…其の徒 王龍溪 語録有り。今の和尚と一般なり。其の書 時に佛書の語を雜ふ、^{ゆゑ}所以に當時斥けて異端と為す。⁽²¹⁾

朱舜水は陸象山が唱える「尊徳性」や王陽明が主張する「講良知」などの学説を批判はせず、書院を創ることは儒教の多元的發展に利すると認めてはいるものの、陸、王の驕り高ぶる様子や他人の言行を模倣する行為に賛同できないといい、さらに王陽明の弟子王龍溪の語録には仏語が混入しているため、その学説は「異端」と看做している。

また、陸象山と王陽明の学説の非について、朱舜水は安東省菴に次のように語る。

孔子生知之聖、其一生並不言生知、所言者學知而已。如曰：「好古敏求」、「我學不厭」、「不如丘之好學也」等語、可見聖人教人之法矣。陸象山、王陽明之非、自然可見矣。不論中國與貴國、皆不當以之為法也。

孔子は生知之聖なるも、其の一生は並びに生知を言はず、言ふ所の者は學知のみ。古を好み敏にして求む、我は學びて厭はず、丘の學を好むに如かざるなり等の語を曰ふが如き、聖人 人を教ふるの法を見るべし。陸象山、王陽明の非は、自然に見るべし。中國と貴國とを論ぜず、皆な當に之を以て法と為すべからざるなり。⁽²²⁾

朱舜水は孔子の「學びてこれを知る」の学問を為す道を伝え、道学は一朝一夕または一人一派で為すべきものにあらず、修行しながら漸進していく必要があると強調している。古來衆聖が為してきたものを學ばなければ、「知」にならず、そのため「古を好み、敏にして以て之を求める」という学問を求める方法を強調するのである。「學びて厭はず」という受け止め方を持ってこそ、人に教える成果を達成できるとし、「人に誨へて倦まず」という態度を持ってこそ、自学が前進するという。日中の学者は陸、王の解釈する「生知」、「頓悟」に學んで解釈するべきではないと考えた。

以上、省菴と朱舜水の間答内容をまとめて見ると、二人の仏教批判は一致してい

る事が察知できる。⁽²³⁾ 但し、朱舜水は陸、王の行為に対し、状況によって客観的に評価を与え、ひたすら批判することはしなかった。このような朱舜水の答えは、当時朱子学に偏向し過ぎていた省菴にとっては、意外な結果であったかも知れない。しかし、これこそがのちの省菴が学問を為す道に、より広い視野を開き、多方面に渡る客観性を持つ思想が生まれる余地を与えたものと思われる。省菴は「答人問朱陸陽明」の中に、次のような悟りが伺える。

聖道坦夷同大道、後生何以說紛紛、可知孟子學夫子、經義要須從本文。

聖道は坦夷 大道に同じ、後生 何を以て説くこと紛紛たる、知るべし 孟子 夫子を學びしを、經義はかなら要ず須く本文に従ふべし。⁽²⁴⁾

次に、朱舜水と徳川藩士との問答内容を挙げ、その学問を為す原則を説明してみたい。まず、近江水口藩主の加藤明友（1615-1683）は朱舜水に下記の質問がある。

僕素宗宋儒、故平生之説話、往往倣之、請莫訝。至若陽明之學、陸氏之裔、我黨之所不雅言。

僕素より宋儒を宗とす。故に平生の説話、往往にして之に倣ふ。請ふ 訝ること莫れ。陽明の學の若きに至りては、陸氏の裔にして、我が黨の雅言せざる所なり。⁽²⁵⁾

これに対し、朱舜水の答えは下記の如くである。

宋儒之學可為也、宋儒之習氣不可師也。至若陽明之事、偶舉其說良知是赤的、以為笑談耳。故曰良知豈是赤的來、非僕宗陽明也、幸勿深疑。

宋儒の學は為むべきなり、宋儒の習氣は師とすべからざるなり。陽明の事の若きに至りては、偶々、其の良知は是れ赤もの的なりと説きしを擧げて、以て笑談を為すのみ。故に曰はく、良知は豈に是れ赤もの的ならんや、と。僕の陽明を宗とするには非ざるなり、幸ひに深く疑ふこと勿れ。⁽²⁶⁾

また、京都の儒者人見野節（竹洞、1637-1696）は朱舜水に

前日以來、欲談性理之事、淺學不免躡等之罪、故不及此。聞昨吉水太守問格物之義。格物者、先儒所說多多、至晦翁、說出窮理來、其所行以居敬為本。窮理、居敬工夫、雖非旦暮容易說出之事、日用之工夫、先生之意如何？

前日以來、性理の事を談ぜんと欲するも、淺學にして等を躡ゆるの罪を免れず、

故に此に及ばず。^{さきころ}昨吉水太守 格物の義を問ふを聞く。格物は、先儒の説く所
 多多あり、晦翁に至りて、窮理を説出し來り、其の行ふ所 居敬を以て本と為す。
 窮理居敬の工夫は、旦暮に容易に説出する事に非ずと雖も、日用の工夫は、先
 生の意は如何。⁽²⁷⁾

と述べている。朱舜水の答えは以下であった。

前答吉水太守問格物致知、粗及朱王異同耳。太守以臨民為業、以平治為功、若
 欲窮盡事事物物之理、而後致知以及治國平天下、則人壽幾何、河清難俟。故不
 若隨時格物致知、猶為近之。至若居敬工夫、是君子一生本等、何時何事、可以
 少得？僕謂治民之官與經生大異、有一分好處、則民受一分之惠、而朝廷享其功、
 不專在理學研窮也。晦翁先生以陳同甫為異端、恐不免過當。

前に吉水太守の格物致知を問ふに答ふるに、粗、朱王の異同に及ぶのみ。太守
 民に臨むを以て業と為し、平治を以て功と為す。若し事事物物の理を窮盡して、
 而して後に知を致して以て治國平天下に及さんと欲せば、則ち人壽 幾何ぞ、
 河の清むは埃ち難し。故に隨時に物に格り知を致すの、猶ほ之に近しと為すに
 若かず。居敬の工夫の若きに至りては、是れ君子一生の本等にして、何れの時
 か何れの事か、以て少き得べけんや。僕謂へらく、治民の官は、經生と大いに
 異なる。一分の好き處有らば、則ち民 一分の恵みを受け、朝廷 其の功を享く。
 専ら理學に在りて研窮するにはあらざるなり。晦翁先生 陳同甫を以て異端と
 為すは、恐くは過當なるを免れざらん、と。⁽²⁷⁾

朱舜水は加藤明友、人見野節に宋学は学すべきところがあるものの、宋の儒者たち
 が互いに攻撃し合う行為を真似してはならないと伝えるほか、彼は陽明学を宗とし
 ない立場を言明している。また、「格物致知」「居敬」などの学問を窮めてもよいが、
 先に窮理してから致知を為す順序は治国、平天下においての実用性、時効性には、
 実践し難いところがあるといい、学問を為す目的は窮理を重んずるよりも民に恩恵
 を蒙らせることにありと訴えている。そのため、南宋の学者陳同甫（陳亮、
 1143-1194）は伝統儒教と対立する観点を以て、学問を論じた結果、「功利派」と看
 做され、朱子から陳同甫の学問を「異端」と排斥したことに対し、朱舜水は朱子の
 批評がやり過ぎであると反論を出している。朱舜水曰く、

宋儒辨析毫厘、終不曾做得一事、況又於其屋下架屋哉。

宋儒は毫厘を辨析するも、終に曾て一事も做し得ず、況んや又た其の屋下に屋を架すにおいておや。⁽²⁹⁾

基本的に朱舜水は程、朱学を尊うとはいへ、彼の「答某書」には、程、朱理学に対する受け止めは「取其精意…、慎母於聲音笑貌之間、漏其泥而揚其波。(其の精意を取り…、慎みて聲音笑貌の間に於いて、其の泥を漏^{にこ}して其の波を揚ぐる母かれ)」とすべし、その「辨析毫厘」奥深い玄論は社会の実用性を離脱したものであり、決して為すべきものではないという。朱舜水は「過於推敲刻覈者、亦不足以引掖後生。跡象摹擬、既足使人厭棄、而理窮渺忽、亦易令人沮喪。既已厭棄、又復沮喪、最易入於異端邪說。(推敲刻覈に過ぐる者は、亦た以て後生を引掖するに足らず。跡象摹擬、既に人をして厭棄せしむるに足る、而して理窮まりて渺忽たれば、亦た人をして沮喪せしめ易し。既に已に厭棄し、又た復た沮喪せば、最も異端邪說に入り易し)」と省菴や周囲の儒者たちに、学問を為すなら、異端、邪説を避けるべき態度、さらに学問を為す目的は実行、実践にあることを繰り返し、その価値観を強調している。

朱舜水の「学知、行知」学説を見る限り、彼は徳川社会に伝えようとする基本精神は朱子がいう「学之之博、未若知之之要。知之之要、未若行之之實。(之を学ぶの博なるは、未だ之を知るの要なるに若かず。之を知るの要なるは、未だ之を行ふの實なるに若かず)」⁽³¹⁾ という学理に近いものと思われる。言い換えれば、朱舜水は朱子学者ではないとはいうものの、広範な知識を得るより、その要点を知る方が肝要で、知識や道理を知るより、それを確実に実践すべしと唱える理念は朱子と合致していることを窺わせる。

三、『初學心法』に見る安東省菴の思想主張

『初學心法』は省菴が宋・元・明各朝、儒者十八名の名言を集めた言論集である。その内容は立志篇(朱熹・王陽明)、存養篇(朱熹・陳北溪・胡敬齋・羅整庵)、省察篇(朱熹・張范陽・陸象山・呉臨川・薛敬軒・陸澄)、勉學篇(楊龜山・朱熹・

陸象山・薛敬軒・王陽明)、致知篇(朱熹・張勉齋)、力行篇(朱熹・薛敬軒)、克己篇(尹和靖・朱熹・薛敬軒・王陽明)、慎言篇(李延平)、改過篇(真西山・王陽明)、雜論篇(楊龜山・李延平・朱熹・張南軒・呂東萊・真西山・許魯齋・薛敬軒・王陽明・羅整庵)など十項目に分類され、計三十九篇の文章を集録している。即ち朱子八篇、薛敬軒六篇、王陽明五篇、羅整庵・陸象山・楊龜山・真西山・李延平は各二篇、残りの儒者の作品は一篇ずつの構成となっている。⁽³³⁾

省菴は『初學心法』の序文に、次のように言及している。

『詩』云：天生烝民、有物有則、民之秉彝、好是懿德。言有物必有法、是民所秉執之常性也。豈可以心與事判乎内外、遺棄事物、專求諸心乎哉。所以朱子格物之訓、居敬窮理之互相發也。世之從事於此者、不知體察諸身心、徒求之於名物、度數、訓詁、詞章之末、智識愈博而心愈惑、著述愈多而道愈離、迨其流蕩忘返、自誤誤人、歸咎於格物窮理之學、是豈朱子之訓乎。…初學之士、潛心於此、庶乎養根本、立趨向而居敬窮理之一助云爾。

詩に云ふ、天生烝民を生ず、物有り則有り。民の彝を秉る、是の懿徳を好む、と。
いふこころ言は物有れば必ず法有り、是れ民の秉執する所の常性なり、と。豈に心と事とを以て内外を判ちて、事物を遺棄し、専ら諸を心に求めんや。朱子格物の訓、居敬窮理の互に相發する所以なり。世の此に従事する者は、諸を身心に體察するを知らず、徒に之を名物度數、訓詁詞章の末に求め、智識愈、博くして心愈、惑ひ、著述愈、多くして道愈、離る。其の流蕩して返るを忘れ、自ら誤まり人を誤まるに迫りて、咎を格物窮理の學に歸す、是れ豈に朱子の訓ならんや。…初學の士、心を此に潛むれば、庶くは根本を養ひ、趨向を立てて居敬窮理の一助とならんと爾か云ふ。⁽³⁴⁾

『初學心法』を編集する主目的は、これから学問を始めようとする者に対し、その根本を養い、方向を見定める重要性を強調することにある。その根本とは「天下の理」を「一心に総べる」、朱子の説く「心」、即ち「心と天とは一つ」であるという立場に立って、己の心を「至公無私の地」とした上で、「敬に居り、理を窮る」学問に従うようにということである。⁽³⁵⁾ 省菴は『詩經』に「天の烝民を生ずる、物有れば則有り。民の秉彝、是の懿徳を好む」と学問を為す態度を喩え、民が持つ常性

は、良い道徳を好んでいるという。

省菴は朱熹、李延平、真西山、羅整菴ら朱子学者の言論を中心に収録している。しかし、朱熹が語る「格物窮理」理論とは、物事に対し、その真理をきめ細かく窮める研究態度が必要なので、無限な物事をともに窮めるのは長い時間がかかり、いつまでにこの研究至上の「窮理」ができるか把握しかねるため、『初學心法』は、「格物窮理」の思想を重点に置かないことにした。即ち、省菴は学問を為すのに、専ら「心学」を窮めるより、生活の実用（事物）と結びつかねばならず、まず「事物」を兼ねながら、「居敬、窮理」という学問を徐々に求めていくという考えである。そのため、『初學心法』の趣旨は、いたずらに「名物、度数、訓詁、詞章」に走って心を惑わせる、玩物喪志の徒が多いことを戒めるための、いわば実用性の方便策として用いられる心構えが見える。ここから安東省菴が学理を学び尊ぶ立場から学理と実用を共に重視する考え方に転じたことが伺える。このような変化は朱舜水の治民の官と經生が異なるという主張と同工異曲であった。

省菴は儒教と仏教の問題や朱、陸、王学について、自分の考えを、『初學心法』の跋文に詳細に記している。やや長いが、ここに引いておこう。

或曰夫道一而已矣。天下之學、非儒則佛、非朱則陸。今是編也、獨朱子以子稱之、似尊之者、然而開卷繼朱子以陽明、終篇繼陽明以整菴、整菴乃朱之徒、陽明乃陸之徒也。子依阿兩間不歸於一、何為雜也？曰：學者當先去客氣、平勝心、至於至公無我之地、而後言朱陸之同異是非、是朱非陸有近於支離之嫌、是陸非朱有近於禪寂之嫌、區區蛙見、未知是非、如何顧其末流之弊。爾世學朱者、以窮理為先務、以說心為異端、博求諸談說誦讀之餘、其所得者所謂說鈴書肆耳。…其學陸者、離事物捨形器、顛求諸言語文字之外、窈冥恍惚、遂失其所以為心者、是其所以流弊入於禪寂也。愚今哀朱子說心者、使學者知朱子說心莫弗該備也。曰然、則程子所謂聖人本天、釋氏本心、其言非與。曰不然、是謂其所以本心之非、非非本心、心與天豈有二乎？曰『傳習錄』自第二條至以博文為約禮工夫、皆真切之言。而如知行合一及致良知、亦陽明之宗旨也、子盍取之？曰雖言切而意見異者、非臆度所定、其不取也、乃欲歸於一也。世辨陸王者、縱客氣、馳勝心、舍其瑾瑜、斥其瑕類、舍其所同而是、攻其所異而非、豈此謂至公無我

之論乎？子其審之。

或ひと曰はく、夫れ道は一のみ。天下の學、儒に非ざれば則ち佛、朱に非ざれば則ち陸なり。今 是の編や、獨り朱子のみ子を以て之を稱す。之を尊ぶ者に似たり。然り而して開卷 朱子に繼ぐに陽明を以てし、終篇 陽明に繼ぐに整菴を以てす。整菴は乃ち朱の徒、陽明は乃ち陸の徒なり。子 兩間に依阿して一に歸せず、何為れぞ雜なるや、と。曰はく、學ぶ者 當に先ず客氣を去り勝心を平げ、至公無我の地に至りて、而して後に朱陸の同異是非を言ふべし。朱を是とし陸を非とするは、支離に近きの嫌ひ有り、陸を是とし朱を非とするは、禪寂に近きの嫌ひ有り。區區の蛙見、未だ是非如何を知らず、其の末流の弊を顧みるのみ。世の朱を學ぶ者、窮理を以て先務と為し、心を説くを以て異端と為し、博く諸を談説誦讀の餘に求むるも、其の得る所の者は、所謂說鈴書肆のみ。…其の陸を學ぶ者は、事物を離れ形器を捨て、顛ら諸を言語文字の外に求め、窈冥恍惚、遂に其の心為る所以の者を失ふ。是れ其の流弊して禪寂に入る所以なり。愚 今 朱子の心を説ける者を哀めしは、學ぶ者をして朱子の心を説ける 該備せざるは莫きを知らしめんとすればなり、と。曰はく、然らば則ち程子の所謂聖人は天に本づき、釋氏は心に本づくは、其の言 非なるか、と。曰はく、然らず。是れ其の心に本づく所以の非を謂ふにして、心に本づくを非とするに非ず。心と天と、豈に二有らんや、と。曰はく、傳習録の第二條より博文を以て約禮の工夫と為すに至るまで、皆な真切の言にして、知行合一及び致良知の如きも、亦た陽明の宗旨なり。子 盍ぞ之を取らざる、と。曰はく、言 切なりと雖も而れども意見異なる者は、臆度の定むる所に非ず。其の取らざるや、乃ち一に歸せんと欲すればなり。世の陸王を辨ずる者は、客氣を縦にして勝心を馳せ、其の瑾瑜を捨てて、其の瑕類を斥け、其の同じくして是なる所を捨てて、其の異なりて非なる所を攻む。豈に此れ至公無我の論と謂はんや。子 其れ之を審かにせよ、と。⁽³⁶⁾

省菴は、朱熹、王陽明、羅整菴、陸象山等の文章を選定収録した時の考えと、文章排列の順序の理由を説明した。「夫道一而已」を主張し、「天下之學、非儒則佛、非朱則陸。(天下の學、儒に非ざれば則ち佛、朱に非ざれば則ち陸)」という気風の中

で、学者が偏見を捨て、諸学の精華を広く学んでこそ至公無我の境地に至ると考えた。「至公無我」とは正に安東省菴が文章を選定収録した時の立場である。ここからわかる省菴の思想主張とは、まず朱子学に傾倒し、その枝葉末節を除き本質を残して方向を転じたもので、朱子の「居敬、窮理」により相互に激励することを願い、陸王学者の「客气」（一時的に発生する元気）と「勝心」（悟りを求める心）を捨て、「至公無我の地」に立ってこそ「朱陸の異同是非」を思考し議論することが可能になるというのである。⁽³⁷⁾

次に朱舜水から省菴に回答した学問を為す道について見てみよう。

中國以制義取士、…彼原無意於修身、齊家、治國、平天下也。…即嘉隆萬曆年間、聚徒講學、各創書院、名為道學、分門別戶、各是其師。聖賢精一之旨未闡、而玄黃水火之戰日煩。高者求勝於德性良知、下者徒襲夫峨冠廣袖、優孟抵掌、世以為笑。是以中國問學真種子幾乎絕息。…賢契慨然有志於此、真千古一人、此孔孟程朱之靈之所鍾、豈以華夷、近晚為限？幸惟極力精進、以卒斯業、萬勿為時俗異端所撓也。

中國は制義を以て士を取る、…彼 原より修身齊家治國平天下に意無きなり。…即ち嘉隆萬曆年間、徒を聚めて講學し、各、書院を創りて、名づけて道學と為し、門を分け戸を別け、各、其の師を是とす。聖賢精一の旨 未だ闡れずして、玄黃水火の戦ひ日に煩はし。高き者は徳性の良知に勝たんと求め、下き者は徒に夫の峨冠廣袖を襲ひ、優孟の掌を低つがごとくにして、世 以て笑と為す。是を以て中國問學の真種子^{ほんしゅ}幾乎ど絶息す。…賢契 慨然として此に志す有り、真に千古の一人、此れ孔孟程朱の靈の鍾まる所なり、豈に華夷近晩を以て限を為さん。幸ひに惟だ力を極めて精進して、以て斯業を卒へ、萬も時俗異端の撓む所と為る勿れ。⁽³⁸⁾

朱舜水が省菴に告げた学問を為すべき道は、まず修身、齐家、治国、平天下を志向せねばならない。無闇に門派を創設したり褒め称えたり批判しあうことは、正道ではないという。省菴を孔、孟、程、朱の道に従わせ、時俗異端（佛語、禪寂）に困らせないようにしている。ここに朱舜水がいう孔、孟、程、朱の道とは、彼が積極的に徳川社会へ推進しようとする聖学の道である。即ち、「儒者之道、振古由今、

極天際地、仲尼日月、無得而踰。…仲尼之道如布帛菽粟、誠無詭怪離奇、如他途之使人炫耀而羨慕。然天下可無雲綃霧縠、必不可無布帛、可無交梨火棗、不可無梁粟。雖有下愚、亦明白而易曉矣。(儒者の道は、古振り今由り、天を極め地に際し、仲尼は日月のごとく、得て踰ゆる無し。…仲尼の道は布帛菽粟の如く、誠に詭怪離奇の、他途の人をして炫耀して羨慕せしむるが如きもの無し。然れども天下 雲綃霧縠 無かるべきも、必ず布帛 無かるべからず、交梨火棗 無かるべきも、梁粟 無かるべからず。下愚有りと雖も、亦た明白にして曉り易からん。) 朱舜水は省菴に孔子の聖道を歩ませ、詭怪離奇の言説から離れて、庶民に「布帛菽粟」のような日常生活に役立つ学問の実効を修めさせようとしている。これに対し、省菴は七言絶句の「論語」を作って、下記のように返事している。

孔道元來如日月、何將燭火漫爭光。工夫當用常行處、若去懸空恐作狂。

孔道 元來日月の如し、何ぞ燭火を將^{もつ}て漫りに光を争はん。工夫は當に常行の處に用ふべし、若し懸空に去かば恐くは狂を作さん。⁽⁴⁰⁾

聖学の道の普及をめぐる省菴にいう朱舜水の意見は、下記の通りである。

近者、中國之所以亡、亡於聖教之隳廢。聖教隳廢、則奔競功利之路開、而禮義廉恥之風息、欲不亡得乎？知中國之所以亡、則知聖教之所以興矣。

近者、中國の亡びし所以は、聖教の隳廢せるに亡ぶるなり。聖教 隳廢せば、則ち功利に奔競するの路 開かれて、禮義廉恥の風息む、亡びざらんと欲するも得んや。中國の亡ぶる所以を知らば、則ち聖教の興す所以を知らん。⁽⁴¹⁾

また、「知、行」について、朱舜水は省菴に次のようにいう。

賢契既好聖賢之學、自然能知能行、未能知未能行、非所患也。況今日所知所行、種種皆是能事、但貴引而申之。他日聖賢真種子崛起、當在貴國、毋多讓也。

賢契 既に聖賢の學を好み、自然に能く知り能く行ふ。未だ知る能はず未だ行ふ能はざるは、患ふる所に非ざるなり。況んや今日知る所 行ふ所、種種皆是れ能事にして、但だ引きて之を申ふるを貴ぶのみ。他日 聖賢の真種子 崛起するは、當に貴國に在るべし、多讓すること母れ。⁽⁴²⁾

さらに、「言、行」について、朱舜水は次のように主張している。

不佞於言行之間、但知内不欺己、外不欺人、行而不言者有之矣、未有能言而不

能行者也。

不佞の言行の間に於ける、但だ内己を欺かず、外人を欺かざるを知るのみ。

行ひて言はざる者は之れ有り、未だ能く言ひて行ふ能はざる者は有らざるなり。⁽⁴³⁾

朱舜水の立場からすれば、彼が「聖学の道」というとき、二つの焦点がある。まず、聖学の道に普及すれば、功利、私慾ないし儒学各派の争い現象を切り抜けられ、禮、義、廉、恥の風習に変貌することができる。次に聖学の道とは、誰もが知（自覚）と行（行動）ができることを望み、言行一致の誠実な社会に達せるものとして目指していかなければならない。いってみれば、朱舜水がいう「聖学の道」は、修身を元にし、伝統を継承することもあれば、自分の思考で見極めていくものもあるといっただろう。

「知、行」の問題について、省菴はその「知行論」の中に、次のように解釈している。

聖道無窮、然其要在知行二者而已矣。蓋人不患於不能行、而患於不能知也。不知、則雖美質善履之人、未免有是非錯誤善惡混淆。故大學之教以格物為先、天下之事豈有不學而能知之理乎。

聖道は窮り無し、然れども其の要は知行の二者に在るのみ。蓋し人行ふ能はざるを患へずして、知る能はざるを患ふるなり。知らざれば、則ち美質善履の人と雖も、未だ是非錯誤し善惡混淆する有るを免れず。故に大學の教へは格物を以て先と為す。天下の事、豈に學ばずして能く知るの理有らんや。⁽⁴⁴⁾

明らかに、省菴は程、朱の「学びて然る後に知る、知って然る後に行う」の学説に傾き、『大学』の「物に本末あり、事に終始あり。先後するところを知れば、即ち道に近し」に示す学問の道を為している。また、陽明学に走る後世がいう「合一、前進」の説について、省菴は次のようにいう。

陽明之徒、據其合一竝進之説、遂指窮理之學為口耳誦説、其流之弊或至廢學。

其曰：竝進可也、曰：合一不可也、不可不辨焉。

陽明の徒、其の合一竝進の説に據りて、遂に窮理の學を指して口耳の誦説と為し、其の流の弊、或ひは學を廢するに至る。其の竝進と曰ふは、可なり、合一と曰ふは、不可なり。辨ぜざるべからず。⁽⁴⁵⁾

朱舜水は省菴の文章を読んだ後、次のような意見を示している。

近作極好、極進、甚喜！静坐澄心、亦不必改、亦不當用佛氏本來面目語。

近作 極めて好し、極めて進めり、甚だ喜ばし。静坐澄心は、亦た必ずしも改めざれ、亦た當に佛氏本來の面目の語を用ふべからず。⁽⁴⁶⁾

格言以存心、養性、修身、齊家、敬君、治國為目。皆粗粗淺近、不取深奥、亦是卿大夫語。…嘗曰：存心養性者、少異於正心誠意、而大別於明心見性也。

格言は存心、養性、修身、齊家、敬君、治國を以て目と為す。皆な粗粗 淺近にして、深奥なるを取らず、亦た是れ卿大夫の語なり。…嘗て曰はく、存心養性は、少しく正心誠意に異なり、而して大いに明心見性に別つあり。⁽⁴⁷⁾

即ち、「その心を正しくせんと欲する者は、まずその意を誠にす」を例にして、省菴に儒者は必ず「存心養性、明德修身」を経て、心を端正した上、「誠」という境に達せると勧め、「存心養性、明德修身」は仏教の趣旨「明心見性」とは異なるものであるという。それで、朱舜水は省菴に文章の中に仏語を混入しないように提示している。朱舜水の教示に対し、省菴は「大學」と題する七言絶句を作り、下記のように返事している。その詩に曰く、

格物可知窮理事	格物は知るべし 窮理の事なるを
後儒説話強安排	後儒の説話 強ひて安排す
用功須自讀書始	功を用ふる 須く讀書より始むべし
頓悟從來葱嶺來	頓悟 從來 葱嶺より來る ⁽⁴⁸⁾

朱舜水は1666年9月に水戸に赴いてから、1682年4月逝世まで省菴とは一度も会わなかったため、二人の往来については書簡に頼るほかない。省菴は、いつも門人の立場に立ち、一筋に学問を歩む道を教わっていた。その親切かつ誠実な態度に感銘を受けた朱舜水は、次のように省菴のことを評価している。

讀來翰、賢契之情、遠而益親、久而愈摯、無一字不流於肺腑。由此推之、在子必孝、在臣必忠。其禮其誼、近來薄俗自不能有。庶幾求之古人、即古人中亦惟英賢之士能之、其他亦必不能也。惟望自強不息、傳為後世美譚、則彼此有光、若使他人以為口實、則彼此均媿矣。

來翰を讀むに、賢契の情、遠くして益、親、久しくして愈、摯、一字の肺腑に

流れざるは無し。此に由りて之を推すに、子に在りては必ず孝、臣に在りては必ず忠ならん。其の禮 其の誼、近來 薄俗の自ら有る能はざるなり。之を古人に求むるに、即ち古人の中 亦た惟だ英賢の士のみ之を能くするにして、其の他 亦た必ず能くせざるに庶幾し。⁽⁴⁹⁾ 惟だ望む 自ら強めて息まず、傳へて後世の美譚と為らば、則ち彼此 光有らん。若使し他人以て口實と為さば、則ち彼此 均ひしく媿じん。⁽⁴⁹⁾

朱舜水と安東省菴は師であり友であり、親子のような異国での知己であったが、最大の思想的相違は詩賦に対する見方にあった。朱舜水は従来「詞章之習（詩作）」を好まず、常に反対の意見を明確に表している。加藤明友からの「詞章之習、害于道義乎否？（詞章の習ひは、道義を害ふや否や）」の質問に、朱舜水は「即無害於道義、亦無益于身心、今之詩詞、與古人之詩遠矣。（即ひ道義を害ふ無きも、亦た身心に益無し。今の詩詞は、古人の詩と遠し）」と答えた。⁽⁵⁰⁾ 門生の奥村庸禮（加賀藩儒）に与える書に曰く：「吟詩作賦、非學也。而棄日廢時、必不可者也。（詩を吟じ賦を作るは学にあらず、而して日を棄て時を廢す、必ず不可なるものなり）」と示すほか、⁽⁵¹⁾「如作詩作賦、無益於世道人心、而但逢迎時俗之所好、即其用心已自不肖、豈非不幸耶？（詩を作り賦を作るが如きは、世道人心に益無し。而して但だ時俗の好む所に逢迎するのみなれば、即ち其の心を用ふる已自に不肖なり、豈に不幸に非ざらんや）」と語っている。⁽⁵²⁾ 詩作を好む省菴に

至於做詩、今詩不比古詩、無根之華藻、無益乎民風世教、而學者汲汲為之、不過取名干譽而已。即此一念、已不可入於聖賢大學之道、故程子曰：為之大足喪志。

詩を做すに至りては、今の詩は古の詩に比ひせず、根無きの華藻にして、民風世教に益無し。而るに學ぶ者 汲汲として之を為すは、名を取り譽を干むるに過ぎざるのみ。此の一念に即かば、已に聖賢の大學の道に入るべからず。故に程子曰はく、之を為すは大いに志を喪ふに足る、と。⁽⁵³⁾

と教示している。即ち、実学主義者の朱舜水にとって、詩作は「民風世教」に無益のみならず、名誉を得るのみで聖学の道乗りにはならない。程子がいう「詩作をすれば、志が喪失する」を例に、省菴の詩作を止めようとしていた。省菴の詩作に対

し、朱舜水は下記のように批評している。

諸詩未見大方、然近日之詩、非理學所急。即夫推敲工緻、不過炫世靡文。尚祈加意精研理性、以為一超世奇男子。望切望切！

諸詩 未だ大方を見ず。然れども近日の詩は、理學の急とする所に非ず。夫の推敲工緻に即きては、炫世の靡文に過ぎず。尚くは祈らん 意を加へ理性を精研して、以て一超世の奇男子と為らんことを。望切望切。⁽⁵⁴⁾

また、省菴の「由布惟長奉書老師、稱頌高義。其人質美而好學、但今年五十、有扞格難成之憂、為可惜耳？（由布惟長 書を老師に奉り、高義を稱頌す。其の人 質美にして學を好む、但だ今年五十なれば、扞格して成り難きの憂ひ有り、惜しむべしと為すのみ）」の問いに、朱舜水は「老而好學、如秉燭之光。不佞年六十二、一日不肯釋手、故詩詞絕不拈著、因質性愚下、無暇及此耳。五十歲比不佞少十二年、謂之一紀、何謂老而難成？真好則無有不可成也。（老いて學を好むは、秉燭の光の如し。不佞 年 六十二にして、一日も手を釋くを肯ぜず、故に詩詞は絶へて拈著せず。質性愚下にして、此に及ぶに暇無きに因るのみ。五十歲は不佞に比ぶるに少きこと十二年、之を一紀と謂ふ、何ぞ老いて成り難しと謂はん。真に好まば則ち成るべからざる有る無きなり）」と答えた。由布惟長は省菴と同郷の柳川藩儒で、同じく詩作も好むが、朱舜水に反対された。

しかし、省菴は嘗て詩作を好む松永尺五に就いて勉強したため、詩作は學問と共にその趣味の一つになったのである。特に省菴は北宋の詩人邵雍（康節、1011-1077）の詩作に惚れ込んでいる。以下、省菴の「和邵康節先生意盡吟」を挙げ、その詩作の考え方を述べる。

予慕邵先生之為人、大賢大愚雖不同、而生太平世年老康健則同、頃玩『擊壤集』、置之几案、時時吟咏、有古人欣然獨笑之樂、其「意盡吟」曰：意盡於物、言盡於誠、矯情鎮物、非我所能。先生之志如此宜哉、道德功業師表百世、此詩可以為事矯飾者之戒也。

予 邵先生の人と為りを慕ふ。大賢大愚同じからずと雖も、而れども太平の世に生まれ、年老ひて康健なるは則ち同じ。^{このころ}頃 擊壤集を玩ぶ。之を几案に置き、時時に吟咏せば、古人の欣然として獨り笑ふの楽しみ有り。其の意盡吟に曰は

く、意は物を盡し、言は誠を盡す、情を矯め物を鎮むるは、我が能くする所に非ず、と。先生の志は此の如し。宜なるかな、道德功業 百世に師表たること。

此の詩 以て矯飾を事とする者の戒と為すべきなり。⁽⁵⁶⁾

詩の内容に表現した「誠」、即ち物事に対し、わざとらしくつくろうことがないものは、省菴の心が惹かれているところに違いない。

また、『省菴先生遺集』の中には、「古詩」九十首（巻八）、「五言律詩」八十五首（巻九）、「七言律詩」七十九首（巻十）、「絶句」一百三十二首（巻十一）が収録されていることから、省菴は如何に詩作を好むかがわかる。⁽⁵⁷⁾

なお、1682年に朱舜水の逝世後、省菴は、次のように「自舜水先生没五年于今、時時夢見之、毎睡覺未嘗涙不溢枕也。謹想先生之靈充天地間、有感使然乎。（舜水先生没してより今に五年、時時に夢に之に見ゆ。睡り覺むる毎に未だ嘗て涙 枕に溢れずんばあらざるなり。謹んで想ふ、先生の靈 天地の間に充ち、感有りて然らしむるや、と）」と、よく夢を見て、師恩を偲んでいる。⁽⁵⁸⁾ その「夢朱先生」の詩を見ると、

泉下思吾否 靈魂入夢頻 泉下 吾を思ふや否や、靈魂 夢に入ること頻りなり

堅持魯連操 實得伯夷仁 堅持す 魯連が操、實に得たり 伯夷が仁

没受廟堂祭 生為席上珍 没しては廟堂の祭を受け、生きては席上の珍と為る

精誠充宇宙 道德合天人 精誠 宇宙に充ち、道德 天人に合す

詩作の立場から見ると、省菴と朱舜水との受け留め方は、全く正反対となっていることが察せられる。

四、「忠」に対する朱舜水と安東省菴の思想主張

朱舜水と省菴の往来書簡及び問答の中に、二人の「忠」をめぐる思想の論述がよく見られる。朱舜水逝世後の翌 1683（天和三）年に、省菴は『三忠傳』（全二冊）を著した。⁽⁵⁹⁾ これは彼が「忠」の思想を示す代表作といえる。省菴がいう「三忠」

とは、平安末期の武將・公卿平重盛（1138-1179）、南北朝の藤原藤房（1295-1380）及び楠木正成（1294-1336）の三人である。

『三忠傳』上巻「平重盛公」の記事は、『源平盛衰記』の内容を参考にして書いた。平重盛は平安末期の武將、公卿の平清盛（1118-1181）の嫡男で、武勇、温厚、誠実な性格を有するため、後白河天皇（1127-1192）の信頼を受けていた。『平家物語』の記述によると、平重盛は平氏一門で良能、健全な重要人物であり、保元（1156）・平治の乱（1159）が起きた際に若き武將として父平清盛を助けて相次いで戦功を上げ、平家を武家の最盛期に立てた人物でもある。平重盛は最後に父清盛と後白河天皇の対立の中で無力であった状況に追い詰められ、自分が「忠ナラント欲スレバ孝ナラズ、孝ナラント欲スレバ忠ナラズ」（『日本外史』）というほど、その心の底に隠していた葛藤があった。重盛の死は、清盛と後白河の対立を抑えていた最後の歯止めが失われたことを意味し、両者の同盟関係を完全に崩壊させることになった。省菴は平重盛の忠孝の義行を取り上げ、後世のモットーとするため、その伝を作ったのである。

藤原藤房の忠臣の事跡について、省菴は「羅山先生の立公傳を一字も変えず左に記す」と述べ、『羅山先生文集』卷三十八に載せた「藤原藤房傳」から引用したという。その序文には、次のようにいっている。

孔子對魯定公曰：君使臣以禮、臣事君以忠。孟子對齊宣王曰：勿變乎色、臣不敢不以正對、異姓之卿、君有過則諫、反覆之而不聽、則去。今果有其人乎？藤原藤房有焉。藤房者、藤亞相宣房之子也。早為納言、元弘元年（1331）八月平族構難、天王出居于河内笠置、平族帥兵環而攻之、九月王師敗矣。王潛出、藤房從之。初及帝、握劍璽、即寶位、得聖人之時、臣妾億兆。當此時、藤房一人而已、可不謂之事君以忠乎！

孔子 魯の定公に對へて曰はく、君 臣を使ふに禮を以てし、臣 君に事ふるに忠を以てす、と。孟子 齊の宣王に對へて曰はく、色を變ずること勿れ、臣 敢へて正しきを以て對へずんばあらず。異姓の卿は、君過ち有らば則ち諫め、之を反覆して聽かざれば、則ち去る、と。今 果して其の人有るか。藤原藤房有り。藤房は、藤亞相宣房の子なり。早に納言と為る。元弘元年（1331）八月 平族

難を構ふ。天王 出でて河内の笠置に居る。平族 兵を帥ゐ、環りて之を攻め、九月 王の師敗る。王 潜かに出で、藤房 之に従ふ。初め 帝の劔璽を握りて、寶位に即き、聖人の時を得るに及びて、臣妾億兆なり。此の時に當りて、藤房一人のみ。之を君に事ふるに忠を以てすと謂はざるべけんや。⁽⁶⁰⁾

藤原藤房は後醍醐天皇（1288-1339）の側近として仕えて、鎌倉幕府倒幕計画に失敗した際、天皇を保護して笠置山へ逃出した。後に藤房は捕えられて下総国に流された。1333年に鎌倉幕府が滅ぼされ、建武の新政後、後醍醐天皇から中納言に任命され復帰したが、天皇の側近重用政治を諫めるも聞き入れられなかったため、新政権に失望して出家して京郊外の岩倉に隠遁してしまった。省菴は藤房の道を守り、義を篤し行為を取り上げ、終始天皇を輔佐したことを忠臣とし、その堅持した節操を述べた。藤房の事跡は後の『大日本史』（百六十三卷、列傳九十）にも記載されるようになった。

楠木正成は南北朝時代の武將、先に述べた藤原藤房の推薦により、鎌倉幕府倒幕計画に失敗した（元弘の変）ため、隠岐に流された。後に楠木は後醍醐天皇の命（勅命）を受け、鎌倉幕府を倒すため挙兵、天皇側についた多くの武將とともに時の執権北条尊氏の大軍と戦い、1333（元弘三）年6月に北条氏（鎌倉幕府）を倒し、武家政治を廃し、天皇政権（天皇親政）の樹立に成功した。南北朝内乱に至る変革期の歴史過程を、南朝側の立場から描いた『軍記物語』（四十卷）に見られる「桜井の別れ」の物語は忠孝の逸話として伝承され、楠木正成がその子正行に与えた遺訓は後世に多大な影響を及ぼした。その内容は下記の通りである。

今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見ん事是を限りと思ふなり。正成既に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りと雖も一旦の身命を助らんが為に、多年の忠烈を失ひて降人に出づること有るべからず。一族若党の一人も死残りてあらん程は、金剛山の辺に引籠って、敵寄来らば命を養由が矢先に懸けて、紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずる。⁽⁶¹⁾

楠木は1336年5月に日本史上最も激しい戦いといわれる「湊川の戦い」で殉死し、四十三歳だった。父の遺訓を守って戦い続けた正行は南朝の將として、足利軍と激

戦し、1348年に二十三歳の若さで戦死した。武家権威の時代には楠木正成を忠臣としてその事跡を顕彰するのはタブー視されていた。徳川の元禄期になって、その忠臣として行為が認められるようになった。朱舜水は徳川社会でその学問を伝える際、ひたすら自分が「虜難」に遭遇したことを訴え、反清復明の「孤忠」思想を表明すると共に、楠木正成の忠臣としての価値を賞賛しつつあった。省菴も南朝の為に力を尽くした楠正成の事跡を、朱舜水と会った二年後、四十歳になった1661（寛文元）年に『楠木傳』を著した。

なお、朱舜水と頻りに書簡往来した加賀藩主の前田綱紀（1643-1724）は嘗て御用畫家の狩野探幽（1602-1674）を招聘し、「楠公訣別の図」を描かれ、朱舜水にその贊を書かせた。

朱舜水逝世の十年後、1692年に徳川光圀は楠木正成父子の忠臣事跡を偲ぶため、湊川に「嗚呼忠臣楠子之墓」の石碑を立て、さらに朱舜水の贊をその陰に刻んだ。それで、水戸学者は楠木正成を理想な尊皇人物として崇拜するようになり、その精神は徳川光圀の『大日本史』を編纂する支えにもなったのである。

上述したように、三人の忠誠心に対し、省菴は『三忠傳』の序文に次のようにいうのである。

本邦忠臣孝子、乘時間出勒徳鍾鼎垂功竹帛者、世不乏人就中。平重盛、藤藤房、楠正成三公、當君昏臣逆之時、極力劬勤夾輔王室。世之相去也、百數十年、其事雖不同、而立綱常一也、可謂本邦之三仁矣。…昔朱先生在長崎、崎人有求楠公父子畫像贊者、乃作傳呈覽、蓋二十有三年于今矣。…於乎楠公得中國大儒之贊、誠千載之奇事也。登時不及撰平、藤二公傳、欠朱先生之贊、是不獨某之有憾、抑二公之不幸也。

本邦 忠臣孝子、時に乘じて間出して、徳を鍾鼎に勒し、功を竹帛に垂るる者、世、人に乏しからず。中に就きて、平重盛、藤藤房、楠正成の三公、君 昏く 臣 逆するの時に當りて、力を極めて劬勤して、王室を夾輔す。世の相去ること百數十年、其の事 同じからずと雖も、而れども綱常を立つることは一なり、本邦の三仁と謂ふべし。…昔 朱先生 長崎に在り、崎人の 楠公父子の畫像の贊を求むる者有り、乃ち傳を作りて覽に呈す。蓋し今に二十有三年なり。…

於乎、楠公 中國の大儒の贊を得るは、誠に千載の奇事なり。登時に平藤二公の傳を撰するに及ばず、朱先生の贊を欠くは、是れ獨り某の撼み有るのみにあらず、抑、二公の不幸なり。⁽⁶²⁾

省菴は『三忠傳』を著した理由は、1660年、朱舜水が長崎に渡航した翌年、楠木父子の贊を求められた舜水のため、二人の伝を書いて差し上げたのだという。また『林羅山先生文集』を入手し、卷三十八所収の「藤原藤房傳」及び村田通信著の『楠正成傳』（1669、寛文九年）を読んだことによって「楠公傳」を『三忠傳』に編入したという。なお、省菴は平重盛と藤原藤房二人の贊を朱舜水に書いてもらわなかったが、思えば思うほど悔まれてならないと記している。『三忠傳』は朱舜水逝世二年後の1684（貞享元）年に刊行され、省菴の朱舜水の忠義行為を追憶した作品といっても過言ではない。

楠木正成の「忠」をめぐる、省菴はまず「守約嘗欲諡楠公正成為忠武、庶人議諡得無罪乎？（守約 嘗て楠公正成に諡して忠武と為さんと欲す、庶人 諡を議するは、罪無きを得んや）」と聞き、朱舜水は

柳下惠之稱、乃其妻諡之。文中子、乃門生諡之。但要公而當耳、於禮無戾也。易名之典、在於人心。人心思慕哀傷之、諡為忠武、適得其宜。

柳下惠の稱は、乃ち其の妻 之に諡す。文中子は、乃ち門生 之に諡す。但だ公にして當なるを要するのみ、禮に於ける 戾る無きなり。易名の典は、人心に在り。人心 思慕して之を哀傷し、諡して忠武と為すは、適に其の宜しきを得。⁽⁶³⁾と答えた。朱舜水は楠木正成のために書いた贊は、下記のようなものである。

忠孝著乎天下、日月麗乎天。天地無日月、則晦蒙否塞。人心廢忠孝、則亂賊相尋、乾坤反覆。余聞楠公諱正成者、忠勇節烈、國士無雙。…誓心天地、金石不渝、不為利回、不為害怵、故能興復王室、還於舊都。…觀其臨終訓子、從容就義、託孤寄命、言不及私。自非精忠貫日、能如是整而暇乎！父子兄弟、世篤忠貞、節孝萃於一門、盛矣哉！

忠孝 天下に著はれ、日月 天に麗く。天地 日月無くんば、則ち晦蒙否塞す。人心 忠孝を廢すれば、則ち亂賊 相尋ぎ、乾坤 反覆す。余聞く、楠公 諱は正成なる者、忠勇節烈、國士無雙…心を天地に誓ひ、金石渝らず、利の為に回はず、

害の為に怵れず、故に能く王室を興復し、舊都に還す。…其の終りに臨みて子を訓ふるを觀るに、従容として義に就きて、孤に託して命を寄せ、言 私に及ばず。精忠 日を貫くに非ざるよりは、能く是の如く整にして暇ならんや。父子兄弟、世々忠貞に篤く、節孝一門に萃まる。盛んなるかな。⁽⁶⁴⁾

楠木正成が忠誠心を以て天地に誓い、寡を以て衆を反撃し、叛逆の徒と戦って負けても屈せず、父子は終に身を以て殉死したので、朱舜水是「純臣」と称した。

ここで朱舜水の「忠」に対する概念を、すべて引いておこう。まず、朱舜水は
盡己之謂忠、循己之謂私、所爭毫釐之間耳。而其德業所至、禍福所基、遂有天淵之隔。凡百有位、但當致其身以事其君、幸勿徇其私而敗厥德也。

己を盡くすを之れ忠と謂ひ、己に循ふを之れ私と謂ふ。爭ふ所 毫釐の間のみ。而れども其の德業の至る所、禍福の基づく所、遂に天淵の隔て有り。凡百の有位、但だ當に其の身を致して以て其の君に事ふべし、幸ひに其の私に徇ひて厥の徳を敗ること勿れ。⁽⁶⁵⁾

といい、また

盡己謂忠、推己謂恕、固也。此己果易盡哉？仁義禮智、天之所賦。子臣弟友、人之所萃。於斯有歉焉、尚得謂之忠哉？老老及人、幼幼及人、即盡其己而推之耳。乃有舍其在我、經營分外、謂之何哉？

己を盡くすを忠と謂ひ、己を推すを恕と謂ふは、固よりなり。此の己は果して盡し易からんや。仁義禮智は、天の賦する所なり、子臣弟友は、人の萃まる所なり。斯に於いて歉らざる有るに、尚ほ之を忠と謂ふを得んや。老を老として人に及ぼし、幼を幼として人に及ぼすは、即ち其の己を盡くして之を推すのみ。

乃ち其の我に在るを舍きて、分外に經營する有るは、之を何とか謂はんや。⁽⁶⁶⁾

と述べている。朱舜水是朱熹が「忠恕」を「己の心を竭し盡すを忠と為、人の心を付り度るを恕と為」と注釈した例を取り上げ、省菴に物事に対し、ベストを尽くすことが「忠」といい、「恕」は「如心」の如き、私心をなくして君（上司）に務め、また、この行為を回りの人達に及ぼせることで「恕」の境界に達するという。なお、良い修養を得るため、孟子が唱える「仁義禮智」の四端を、身を以て実践すると同時に、五倫の道を兼修すべしと述べている。いってみれば、このように、朱舜水の

主張は朱子がいう「忠信は人を以て之を言ふ。蓋し忠信は理を以て言へば只是れ一箇の実理。人を以て之を言へば則ち是れ忠信。蓋し人做し出し來るに因らざれば、この道理を見得ず」⁽⁶⁷⁾と実理を強調すること、さらに、伊藤仁齋がいう「忠信敬恕は、力行の要、人功夫を用うる上に就いて名を立つ。本然の徳にあらず。故にこれを修為と謂う」という修養を重んずる論点に近いものと思われる。

なお、人臣として、如何に「忠」を尽くすか、朱舜水はこう述べている。

忠之時、義亦大矣。而大臣之忠、則與小臣異焉。大臣者正己物正、而潛格其君心之非者也。至於輔幼主、抑又難矣。豫養君徳、使其君親端人、見正事、而便佞技巧儉邪之徒、不得進焉。吁、亦難矣哉！非辨徹底誠心、未能勝其任而愉快也。

忠の時は、義亦た大なり。而して大臣の忠は、則ち小臣と異なる。大臣なる者は己を正して物正しく、潜かに其の君心の非を格す者なり。幼主を輔くるに至りては、抑、又た難し。豫め君の徳を養ひ、其の君をして端人に親しみ、正事を見て、便佞技巧儉邪の徒、進むを得ざらしむるなり。^{ああ}吁、亦た難からずや。徹底の誠心を辨ずるに非ざれば、未だ其の任に勝へて愉快とする能はざるなり。⁽⁶⁹⁾

即ち、大臣の忠とは必ず自分から心を正し、もし君の心に非の考えがあれば、感化の策を採り、君を「正人」の道へ導いていくことであるという。幼君を輔佐する場合は、危険、邪惡の徒から離れ、誠心を以て端人に親しくし、正事を見る徳行を養わねばならない。

朱舜水は門生の奥村庸禮に人臣としての基本態度を次のように提示する。

以孝事君則忠、以敬事長則順。忠順不失、自能保其祿位宗廟。孝敬之心、日加純謹、聖賢之道、不在他求、剛而不撓、精而不浮、莫過於是、何多自遜也。

孝を以て君に事ふれば則ち忠なり、敬を以て長に事ふれば則ち順なり。忠順失はざれば、自ら能く其の祿位宗廟を保たん。孝敬の心、日に純謹を加ふ、聖賢の道、他に求むるに在らず、剛にして撓まず、精にして浮ならず、是に過ぐる莫し。何ぞ多く自ら遜るや⁽⁷⁰⁾。

同じく朱舜水の門生、加賀藩儒臣の古市務本は『論語・微子』篇の中に記載した「殷

有三仁焉」の「三仁」と「忠」との関わりを、次のように聞く。

孔子曰：殷有三仁焉。雖微子、箕子、比干三人之行相異、皆稱仁。想夫三賢之行、同出於至誠惻怛之意、各雖謂得其本心。微子去、所以稱仁、自古雖多論說、不解稱其仁之意。蓋三人之行、各隨時安心、故稱其仁否？庶幾仔細告焉。

孔子曰はく、殷に三仁有り、と。微子箕子比干三人の行ひ相異なると雖も、皆な仁を稱す。想ふに夫の三賢の行ひは、同じく至誠惻怛の意に出ず。各、其の本心を得たりと謂ふと雖も、微子は去りて、所以に仁を稱す。古より論說多しと雖も、其の仁を稱するの意を解せず。蓋し三人の行ひは、各、時に随ひ安心す、故に其の仁を稱するや否や。庶幾はくは仔細に告げよ。⁽⁷¹⁾

朱舜水は自分がとらえる「忠」の概念を、折り返し下記のように主張している。

「殷有三仁」之論、致疑於微子之去、不得為仁、此局於一隅之見也、必以一死為忠為仁也。夫臣子之事其君、居恒不能盡啓沃之道、不能竭諫諍之誠、使其君榮國治、迨夫社稷淪亡、徒以一死塞責、其心必曰吾忠也、必曰吾忠如是足也、是乃忠臣之罪人耳！安得謂之仁哉？

殷に三仁有りの論、疑ひを微子の去りしは、仁と為すを得ず、に致す。此れ一隅に局するの見なり、必ず一死を以て忠と為し仁と為さんとするなり。夫れ臣子の其の君に事ふる、居恒啓沃の道を盡す能はず、諫諍の誠を竭くして、其の君をして榮へ國治まらしむる能はざるに、夫の社稷淪亡するに迨びて、徒らに一死を以て責を塞ぎ、其の心必ず吾は忠なりと曰ひ、必ず吾が忠是の如くにして足るなりと曰ふ、是れ乃ち忠臣の罪人なるのみ。安んぞ之を仁と謂ふを得んや。⁽⁷²⁾

微子（名は啓、帝乙の長子、紂の同母庶兄）は紂王の過失を知り、臣下として君主を諫めないのは忠義ではないと深く感じていたが、何度かの諫言が取り上げられず、紂王を悪から善に向かわせることができなかった。そして、当時の形勢を分析し、殷王朝の統治を維持し国を滅亡の禍から救うために、小我を捨てて去って行くことを決めた。舜水は、死を選ばず去った微子の行為は忠義の表現であるので、「仁」と言えると考えた。舜水は微子を引き、「父子有骨肉、而臣主以義屬。人臣三諫而不聽、則其義可以去矣。（父子は骨肉有りて臣主は義を以て屬す。人臣三諫して聽

かれざれば、則ち其の義以て去る可し)」と述べ、⁽⁷³⁾ 微子は人臣として再三君主を諫め、義を尽くしたと考えている。また再度微子の「王子以出為道、王子弗出、我乃顛躋、自靖、人自獻於先王。(王子出づるを以て道と為す。王子出でずんば、我れ乃ち顛躋せん。自ら靖んじて人自ら先王に獻らん)」を引き、微子の行く道が危険と困難に満ちていたことは言わずとも知れると述べている。これらは、自身が中国を離れ、日本に居留するのは人生の策略と知恵であり、明朝遺臣としての仁義行為の延長であることを暗に示している。

この「仁」について、省菴も別の角度から次のように述べている。

能行達道為仁、仁本為心、徳不求可乎。曰不可也。不求則意馬心猿、無以為心。所謂求者、非務外之謂。謂收斂操持也、三仁用心也。雖迹不同、而一以歸仁、可謂能行達道矣。求而不失、則庶乎其可。

能く達道を行ふを仁と為す。仁は本心徳^{もと}為り、求めずして可ならんや。曰はく、不可なり。求めざれば則ち意馬心猿、以て心と為ること無し。所謂求むとは、外を務むるの謂ひに非ず。收斂操持を謂ふなり、三仁の心を用ゆるなり。迹同じからずと雖も、而れども一以て仁に歸す、能く達道を行ふと謂ふべし。求めて失はざれば、則ち其れ可なるに庶乎からん、と。⁽⁷⁵⁾

省菴が忠孝の道を成し遂げつつある行為を、朱舜水は

若夫忠孝之性、賢契得之天植、又能尚友古人以發明之、真足使人宗師、不佞何敢居然居其功！

夫の忠孝の性の若きは、賢契之を天植に得、又た能く古人を尚友して以て之を發明し、真に人をして宗師とせしむるに足る、不佞何ぞ敢へて居然として其の功に居らん。

と賞賛している。

五、おわりに

本文は『學部通辨』、「知・行」、「朱陸の辨」、「忠」など四つの思想面を中心に朱舜水と安東省菴の主張の異同を述べながら、両者の影響し合う関係を検討してきた。

このような文化伝播の現象は、徳川時代の日中儒学交流史において、極めて意義があるものと思われる。

安東省菴は初めに松永尺五に学んだがゆえに、朱子学者を自称しているが、朱舜水との書簡往来、問答、対談などを行ったことによって、彼が中年以降に編纂した『初學心法』、『三忠傳』、『恥齋漫録』の内容は、いずれも非朱、非陸の思想主張に変わりつつあり、特に陸、王に関する諸学説を批判の立場から客観的な態度を取るようになったことがわかる。いうまでもなく、その思想の変遷は朱舜水から多く影響を受けたものに違いない。また、仏教思想に対し、二人はともに強く批判したため、儒仏の融合する可能性を見出せなかった。しかし、他の学派との融合や詩作によって、学問を為すことについて、安東省菴は朱舜水より柔軟な姿勢を見せていた。

朱舜水は「本非倡明道學而來、亦不以良知赤白自立門戶。(本より道學を倡明して來たるに非ず、亦た良知の赤白を以て自ら門戶を立つるに^{あら}不ず)」と称し、はっきり自分は陽明学者ではないと表明している。しかし、彼は宋明理学の賛同したところも少なくなく、いってみれば、彼は宋明理学とは、きっぱり線を引くことができなかつた。ただ宋明理学はややもすれば、実用に結びつかない玄説を論争する気性を常に批評していた。例を挙げると、南宋の陳同甫(陳亮)は朱子に異端視されたとはいうものの、朱舜水は次のように述べている。

晦庵先生力詆陳同甫、議論未必盡然。況彼拾人殘唾、亦步亦趨者、豈能有當乎？

晦庵先生 力めて陳同甫を詆るも、議論 未だ必ずしも盡くは然らず。況んや彼の人の殘唾を拾ひ、亦た歩き亦た趨る者、豈に能く當たる有らんや。⁽⁷⁸⁾

朱舜水にしてみれば、陳同甫は功利主義の学者と言われるが、彼の学問を為す方法が社会への実用に繋がっていることは、否定できないというのである。

清朝以降、中国の思想界において、宋明の理学を反対する趨勢が次第に形成していく中、虚学や実用的でない理論がしばしば批評されるようになった。朱舜水は明朝の理学者のややもすれば毫釐を窮研していこうとする態度が社会に益することなく、国家が満清に滅ぼされたことを痛恨している。彼は自分の思想主張の伝承を次のように言う。

痛憤明室道學之禍、喪敗國家、委銅駝於荆棘、淪神器於犬羊、無限低徊感慨故

耳、未嘗自叛於周、程、張、朱也。

明室の道學の禍、國家を喪敗せしめ、銅駝を荆棘に委ね、神器を犬羊に淪めしを痛憤し、無限に低徊感慨する故のみ、未だ嘗て自ら周程張朱に叛かざるなり。⁽⁷⁹⁾

朱舜水は日本で伝える儒教思想の脈絡は、周敦頤（道）、張載（氣）、二程・朱熹（理）が成り立つ思想体系から離脱していないといい、自分が孔子、孟子の思想を敬い奉り、儒教の各学説を総括する形で実学、実践学の方へ持っていくように精しく説くのである。実学そのものに抵触する学説さえあれば、彼は必ずといってよいほど批評を加え、その学問を為す捉え方は実践学に拘る側面が伺える。言い換えれば、朱舜水が語ろうとする学説は、教育制度、政治統治、哲学思想及び生活の実践など、多分野に亘る問題に及び、時には自分の主観的な意識が含まれると思われる。

朱舜水は「中原陽九述略」の中に、こういつている。

中國之有逆虜之難、貽羞萬世、固逆虜之負恩、亦中國士大夫之自取之也。

中國の逆虜の難有りて、羞を萬世に貽すは、固より逆虜の恩に負けしなるも、亦た中國の士大夫の自ら之を取りしなり。⁽⁸⁰⁾

また、

豈有君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友之道、而與濂、洛、關、閩之學有異焉者？濂、洛、關、閩五先生研精窮理、寧有疑貳？晦庵先生得力於「道問學」、尚與「尊徳性」者分別頓漸、朱陸之徒遂爾互相牴牾。凡此皆實理實學、與浮夸虚偽豈不風馬牛不相及乎？浮夸虚偽以文其奸、以售其術、此小人無行之尤者、而謂君子為之乎？

豈に君臣父子夫婦昆弟朋友の道にして、濂洛關閩の學と異なること有る者有らん。濂洛關閩の五先生は精を研め理を窮む、寧くんぞ疑貳有らん。晦庵先生力を道問學に得、尚ほ尊徳性なる者と頓漸を分別して、朱陸の徒遂にしか爾く互ひに相牴牾す。凡そ此れ皆な實理實學にして、浮夸虚偽と豈に風馬牛の相及ばざるに不ざらんや。浮夸虚偽は、以て其の奸を文り、以て其の術を售る、此れ小人の行ふこと無きの尤なる者なるに、君子之を為すと謂ふか。⁽⁸¹⁾

と述べる。朱舜水は儒教が強調する基本精神は五倫の道にあるといい、濂、洛、關、

閩各学派が求めようとする中核的な価値とは差異がない。そのため、「我是汝非」を必死に論戦する必要はないという。朱、陸は「鵝湖の会」で論争した焦点は伝統のある儒学の中の「道問学」と「尊徳性」の思想主張ではあったが、「道問学」と「尊徳性」とが、どちらが先かという問題設定が両説をめぐって後世が互いに攻撃し合う原因になってしまう。この方向への発展は間違いであると朱舜水は批判する。何故ならば、このような論争は社会の民生や人倫日用には全く益することはない「浮夸虚偽」だからだ。朱舜水によれば、学問と道徳とは、いずれも欠けてはいけないものであって、両説はどう補完してよい効果を取めるのか、如何に実践に移していくのか、これこそ君子が聖道を求める根本であると指摘する。一方、朱舜水は「然るに陸は朱に及ばず、徳性や問学の異にあらずなり」と、はっきり批評しているように、彼は自分が持つ儒教の世界観から出発し、儒教思想と実学理念とを結び付けようとし、いわば、実践に集約される思想に重きを置くものと思われる。そして朱舜水はそうした学問を為す基本の方法を、省菴に次のようにいうのである。

讀書作文、以四書六經為根本、佐之以左國子史、而潤色之以古文。

書を讀み文を作るは、四書六經を以て根本と為し、之を佐くるに左國子史を以てし、而して之を潤色するに古文を以てす。⁽⁸²⁾

また、人として、人臣として、為すべき道について、朱舜水はこのような言葉を省菴に提示している。

余謂君義臣忠、父慈子孝、夫和婦順、兄友弟恭、而朋友敬信、此天下之至文也。而孝又為百行之源、孝則未有不忠、未有不恭敬信誠者也。

余謂へらく、君 義たり 臣 忠たり、父 慈たり 子 孝たり、夫 和し 婦 順し、兄 友たり 弟 恭たり、而して朋友 敬信あれば、此れ天下の至文なり。而して孝 又た百行の源と為る。孝なれば則ち未だ忠ならざる有らず、未だ恭敬信誠ならざる者有らざるなり。⁽⁸³⁾

このように朱舜水の伝える聖学の道は、省菴との往来書簡及び二人の問答の中に随所に見られる。いってみれば、二人の学問は濂、洛、關、閩の道学（新儒学）の思想脈絡に繋がっていると見てよい。例えば、濂派の周敦頤の心性説や道徳観、またその「太極」を『中庸』で示される「誠」と結びつけた哲学思想、洛派の程顥・

程頤兄弟が確立した理気の対立、程顥の仁を以て忠、恕を表すことによって、「天人合一」の最高の境に達する学説、程頤の四書、六經を以て学問を為す目標とし、「仁愛即ち道」を主張したり、「涵養は須く敬を用うべく、進学は則ち知を致すに在り」を提唱したりする学説、さらに關派の張載が仏老の玄、虚の学説を反対する態度や「天地の為に心を立て、生民の為に命を立て往聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開く」という格言の精神など、いずれも、二人の学問を為す範疇に入っているものと思われる。

朱舜水が各学派の論説を批評していくプロセスにおいて、省菴はその学問や思想主張が徐々に導かれていくようになった。次は「脚注」めぐる朱舜水のとらえ方を述べてみたい。

まず朱舜水は省菴の問にこう答えている。

書理只在本文、涵泳深思、自然有會。註脚離他不得、靠他不得。…所謂博學而詳說之、將以反說約也。若義理融會貫通、真有活潑潑地之妙、此時六經皆我註脚、又何註脚之有？

書の理は只だ本文に在るのみ、涵泳深思せば、自然に會する有らん。註脚は他を離れ得ず、他に靠り得ず。…所謂博く學びて詳かに之を説くは、將に以て反りて約を説かんとするなり。若し義理 融會貫通し、真に活潑潑地の妙有らば、此の時 六經は皆な我が註脚なり、又た何の註脚か之れ有らん。⁽⁸⁴⁾

かつて程子がいう「学者は『論語』、『孟子』を熟読精思すれば、六經を読むを待たずして自明できる」という主張に対し、朱舜水は下記のように批評している。

六經豈有不讀自明之理？此等議論極好、甚須尋味。蓋天下文字千頭萬緒、道理只是一箇。若能明得此理、引而伸之、觸類而長之、無往非是。若執何書以為鵠的、猶非絕頂議論。

六經は豈に讀まずして自ら明らかなるの理有らん。此れ等の議論は極めて好し、甚だ尋味するを^{もと}須む。蓋し天下の文字は千頭萬緒なるも、道理は只だ是れ一箇のみ。若し能く此の理を明らかにし得、引ひきて之を伸べ、類に觸れて之を長くせば、往くとして是に非ざるは無し。若し何れかの書を執りて以て鵠的と為さば、猶ほ絶頂の議論に非ず。⁽⁸⁶⁾

また以下のように述べる。

明道先生甚渾厚寛恕、伊川先生及晦菴先生、但欲自明己志、未免有吹毛求疵之病。

明道先生は甚だ渾厚寛恕、伊川先生及び晦菴先生は、但だ自ら己が志を明らかにせんと欲して、未だ毛を吹きて疵を求むるの病有るを免れず。⁽⁸⁷⁾

朱舜水は濂、洛、關、閩の儒学伝統を受け継ぐ者とはいえ、自分が「即使其中指摘一二、亦未為過、不聞君子和而不同乎？（即使ひ其の中に一二を指摘するも、亦た未だ過ちと為さず。君子は和して同ぜざるを聞かざるや）」⁽⁸⁸⁾と自称したように異議がある場合、率直に批判する個性を堅持していた。程朱理学、陸王心学が日増しに僵化していく中、彼は徳川初期の儒教の発展を、実用を重んずる新しい方向へ導いた。そして学問を為す道においては、省菴は、次のように悟っていた。

能知達道為知、知本為良知、不學可乎？曰：不可也。不學、則人面獸心、無以致知。所謂學者、非佔畢之謂、謂居敬窮理也。舜明於庶物、察於人倫、又善與人同、可謂能知達道矣。學而弗懈、則庶乎其可。

能く達道を知るを知と為す、知は本良知^{もと}為り、學ばずして可ならんや。曰はく、不可なり。學ばざれば、則ち人面獸心、以て知を致すこと無し。所謂學とは、佔畢の謂ひに非ずして、敬に居り理を窮むるを謂ふなり。舜は庶物を明らかにし、人倫を察するも、又た善は人と同じくす。能く達道を知ると謂ふべし。學びて懈らずんば、則ち其れ可なるに庶乎からん、と。⁽⁸⁹⁾

上述のように、安東省菴と朱舜水が異国の儒者同志として成し遂げた思想交流の「異」「同」は、なお、徳川初期の社会の儒学界に定着せしめる様相が多様な思想を融合する新風を吹き込んだといえよう。上記省菴の「知道」の論述を引用を以って、本稿の結語とする。

〔注〕

- (1) 『省菴先生遺集』巻9、『安東省菴集 影印編Ⅰ』（『柳川文化資料集成』第2集、福岡：柳川市史編集委員会、2002）所収、頁512。引用文の読み下しは、原信太郎氏の協力を得た。以下同じ。

- (2) 『省菴先生遺集』 卷首、頁 373-374。本序文は 1716 年に書かれた。
- (3) 『省菴先生遺集』 卷 7、頁 488。
- (4) 筆者編著『新訂朱舜水集補遺』（台北：台湾大学出版センター、2004）、頁 54-95 所収。
- (5) 安東省菴「元祿戊寅告守直文 遺訓」、『省菴先生遺集』 卷 7、頁 484。
- (6) 安東省菴「恥齋漫録序」、『甘雨亭叢書』、『安東省菴集 影印編 I』 所収、頁 547。本序文は 1672 年に書かれた。
- (7) 『甘雨亭叢書』は安中藩主の板倉勝明が近世（1845～1867）名家の写本類を集めたものである。内容は「正篇」五集「別篇」二集、「正篇」は近世儒者の漢文随筆、「別篇」の第一集は和歌・和文、第二集はその他十種類の文献（八冊）計五十六冊ものとなっている。なお、第二集八冊が欠けたため、目下は四十八冊ものしか残されていない。台湾出版の『叢書集成』は、この四十八冊の版本から採ったものである。
- (8) 板倉勝明「省菴安東先生傳」、『甘雨亭叢書』、頁 548。
- (9) 菰口治・岡田武彦『安東省菴・貝原益軒』（日本思想家 儒學篇 9、東京：明德出版社、1985）、頁 67。
- (10) 陳建『學部通辨』（台北：廣文書局、1971）、自序、頁 1。
- (11) 陳建『學部通辨』、後編序、頁 1。
- (12) 安東省菴「學部通辨跋」、『省菴先生遺集』 卷 4、頁 439。
- (13) 李明輝『四端與七情：關於道德感情的比較哲學探討』（東亞文明研究叢書 24、台北：台湾大学出版センター、2005）、頁 326。
- (14) 陳建『學部通辨』、自序、頁 1。
- (15) 貝原益軒は始めに朱子学を学び、後に陸、王学をも兼修の立場をとっていた。彼は 1665 年三十六歳に陳建が朱、陸学の差異を詳細に弁明した『學部通辨』を閲覧した後、陸学の非について「陸象山論」（『自娛集』 卷七）を著した。さらに、益軒は老莊、仏教及び陸学を批判し、濂、洛、關、閩の「正学」の道を歩むことにした。詳しくは岡田武彦「貝原益軒」、前掲菰口治・岡田武彦『安東省菴・貝原益軒』、頁 110-112 所収。
- (16) 戴瑞坤「朱子學對中日韓的影響」、『逢甲人文社會學報』 第 1 期、2000 年、頁 103-104。
- (17) 朱舜水「答安東守約問」、朱謙之『朱舜水集』（北京：中華書局、1981）上冊、頁 396。
- (18) 同注 17。
- (19) 安東省菴「朱陸辨」、『省菴先生遺集』 卷 1、頁 401-402。
- (20) 林慧君「朱舜水對日本安東省菴思想的影響」、『長庚科技學刊』 第 5 期、2006 年、頁 78。
- (21) 朱舜水「答安東守約問」、『朱舜水集』 上冊、頁 397。
- (22) 朱舜水「與安東守約書」、『朱舜水集』 上冊、頁 166-167。
- (23) 朱舜水の仏教批判について、拙稿「朱舜水の關佛思想：論其與德川社會的相互影響」、『アジア文化交流研究』（大阪：関西大学、2008） 第 3 号を参照されたい。
- (24) 安東省菴「答人問朱陸陽明」、『省菴先生遺集』 卷 11、頁 541。
- (25) 朱舜水「答加藤明友問」、『朱舜水集』 上冊、頁 382。
- (26) 同注 25。
- (27) 朱舜水「答野節問」、『朱舜水集』 上冊、頁 386。
- (28) 同注 27。

- (29) 朱舜水「與安東守約書」、『朱舜水集』上冊、頁 160。
- (30) 朱舜水「答某書」、『朱舜水集』上冊、頁 110。
- (31) 朱熹著、鄭明等校點『朱子語類』（上海：上海古籍、2002 年）、卷 13、頁 386。
- (32) 安東省菴の『初學心法』（一卷一冊）は 1668（寛文八）年に完成した。後京都の書肆吉野屋権兵衛が 1675（延寶三）年に出版し、現に九州歴史博物館柳川古文書館「安東家史料」に所蔵している。詳しくは『安東省菴集 影印編 I』、頁 1-24 参照。
- (33) 『安東省菴集 影印編 I』、頁 1-24。
- (34) 安東省菴「初學心法序文」、『安東省菴集 影印編 I』、頁 1-2。
- (35) 『安東省菴集 影印編 I』、頁 3。
- (36) 安東省菴「初學心法跋」、『省菴先生遺集』卷 4、頁 438。
- (37) 『安東省菴集 影印編 I』、頁 3。
- (38) 朱舜水「與安東守約書」、『朱舜水集』上冊、頁 173-174。
- (39) 朱舜水「論安東守約規」、『朱舜水集』下冊、頁 578-579。
- (40) 安東省菴「論語」、『省菴先生遺集』卷 11、頁 541。
- (41) 朱舜水「答安東守約書」、『朱舜水集』上冊、頁 183。
- (42) 朱舜水「答安東守約書」、『朱舜水集』上冊、頁 187。
- (43) 朱舜水「答安東守約書」、『朱舜水集』上冊、頁 179。
- (44) 『省菴先生遺集』卷 1、頁 396。
- (45) 『省菴先生遺集』卷 1、頁 396。
- (46) 朱舜水「答安東守約書」、『朱舜水集』上冊、頁 183。
- (47) 朱舜水「答安東守約書」、『朱舜水集』上冊、頁 157。
- (48) 安東省菴「大學」、『省菴先生遺集』卷 11、頁 541。
- (49) 朱舜水「答安東守約書」、『朱舜水集』上冊、頁 179。
- (50) 朱舜水「答加藤明友問」、『朱舜水集』上冊、頁 382。
- (51) 朱舜水「與奥村庸禮書」、『朱舜水集』上冊、頁 257。
- (52) 朱舜水「答中村玄貞問」、『朱舜水集』上冊、頁 403。
- (53) 朱舜水「答安東守約問」、『朱舜水集』上冊、頁 394-395。
- (54) 朱舜水「答安東守約書」、『朱舜水集』上冊、頁 186。
- (55) 朱舜水「答安東守約問」、『朱舜水集』上冊、頁 400。
- (56) 『省菴先生遺集』卷 8、頁 499。
- (57) 『省菴先生遺集』卷 8、頁 498-544。
- (58) 『省菴先生遺集』卷 9、頁 518。
- (59) 目下『三忠傳』は日本で確認したものは十九冊ある。(1) 京都の書肆柳枝軒が 1684（貞享元）年に刊行した版本（二卷四冊）。(2) 天明期に江戸の小川彦九郎の版本（一冊）。(3) 大阪の河内屋茂兵衛版本（十四冊）。また、国立公文書館「内閣文庫」、柳川古文書館「渡辺家史料」、東京大学総合図書館、京都大学附属図書館にもその蔵本がある。詳しくは『安東省菴集 影印編 I』、頁 25-70。
- (60) 安東省菴『三忠傳』上、『省菴先生遺集』、頁 43。
- (61) 植村清二『楠木正成』（東京：至文堂、1967）、頁 185。

- (62) 安東省菴「三忠傳序」、『省菴先生遺集』卷3、頁425。
- (63) 朱舜水「答安東守約問」、『朱舜水集』上冊、頁399。
- (64) 朱舜水「楠正成像贊」、『朱舜水集』下冊、頁572。
- (65) 朱舜水「忠」、『朱舜水集』下冊、頁499。
- (66) 朱舜水「忠恕」、『朱舜水集』下冊、頁498。
- (67) 朱熹『朱子語類』卷21、頁722。
- (68) 『語孟字義』卷之下、吉川幸次郎・清水茂校注『伊藤仁齋 伊藤東涯』（日本思想大系33、東京：岩波書店、1983）所収、忠信第5條、頁65。
- (69) 朱舜水「訓忠」、『朱舜水集』下冊、頁499。
- (70) 朱舜水「答奥村庸禮問」、『朱舜水集』上冊、頁376。
- (71) 朱舜水「答古市務本問」、『朱舜水集』上冊、頁379。
- (72) 朱舜水「答古市務本問」、『朱舜水集』上冊、頁379-380。
- (73) 朱舜水「答古市務本問」、『朱舜水集』上冊、頁380。原文は『史記・卷三十八・宋微子世家第八』の「父子有骨肉、而臣主以義屬。故父有過、子三諫不聽、則隨而號之。人臣三諫不聽、則其義可以去矣。（父子は骨肉有りて臣主は義を以て屬す。故に父過ち有り、子三諫して聽かれざれば、則ち隨いて之に號ぶ。人臣三諫して聽かれざれば、則ち其の義を以て去る可し）」による。
- (74) 朱舜水「答古市務本問」、『朱舜水集』上冊、頁380。原文は『尚書：微子』の「商今其有災、我興受其敗。商其淪喪、我罔為臣仆。詔王子出迪、我舊云刻子。王子弗出、我乃顛隲。自靖、人自獻于先王、我不顧行遯。（商今其れ災い有らば、我れ興ちて其の敗れを受けん。商其れ淪喪せば、我れ臣僕爲ること罔けん。王子に詔ぐ、出づるは迪なり。我れ舊云えること子を刻る。王子出でずんば、我れ乃ち顛隲せん。自ら靖んじて人自ら先王に獻らん。我れ行き遯れんことを顧みず）」による。
- (75) 『省菴先生遺集』卷4、頁446。
- (76) 朱舜水「答安東守約書」、『朱舜水集』上冊、頁176。
- (77) 朱舜水「答某書」、『朱舜水集』上冊、頁112。
- (78) 朱舜水「答奥村庸禮書」、『朱舜水集』上冊、頁274。
- (79) 朱舜水「答某書」、『朱舜水集』上冊、頁111。
- (80) 朱舜水「中原陽九述略」、『朱舜水集』上冊、頁1。
- (81) 朱舜水「答某書」、『朱舜水集』上冊、頁110-111。
- (82) 朱舜水「答安東守約問」、『朱舜水集』上冊、頁368。
- (83) 朱舜水「答安東守約問」、『朱舜水集』上冊、頁369。
- (84) 同注83。
- (85) 同注83。
- (86) 同注83。
- (87) 朱舜水「答安東守約問」、『朱舜水集』上冊、頁402。
- (88) 朱舜水「答某書」、『朱舜水集』上冊、頁111。
- (89) 『省菴先生遺集』卷4、頁446。